

不 毛

平林たい子

講 談 社

不 毛

著者の了、
解により
検印廃止

© 平林たい子 一九六二

昭和三十七年六月十日 第一刷発行

三〇〇円

著 者 平 林 たい 子

発 行 者 野 間 省 一

東京都文京区音羽町三ノ一九

印刷所 豊国印刷株式会社

(鈴木製本)

発行所

株式会社

講 談 社

社

東京都文京区音羽町三ノ一九

振替 東京 三九三〇

電話大塚(九四一)大代表三二二

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

不

毛

裝
幀
小
堀
新
子

それは終戦からまだあまり時がたつてゐない頃でしたから、世間は大きく波立つてゐました。新聞やラヂオは手にとつた自由を試みてみるかのやうにどぎつく喚いてゐました。

あの日を境に苦しい時は去つて、考へても見たことのない時世が奇蹟のやうに訪れてゐました。夢ではないかと秋子は自分を疑つたことさへありました。引力のない世界に行つたやうに人間は身がるになつて何でもできる心地です。

「今ぢやないの。たうとうその時がやつて來たぢやないの。よかつたわねえ。思ひ切つて仕事をなさいよ」

秋子は興奮のあまり夫の成一にいくども上ずつた聲でさう言ひました。それは激勵といふよりも秋子の性格から督促のひびきを帯びたささやきでした。

成一は毎日外出してゐました。多分人に逢つたり會合に出たりしてゐるのでせう。秋子が機嫌よく送り出すのは何かの負目を與へてゐるやうなものです。

が、歸つて來たとき秋子にそんな種類のことを言はれると、彼は不機嫌な浮かぬ顔をしてゐました。

「昔のお殿様や満洲ゴロなどを入れて黨をつくらうとしてゐるんだぜ。何もかも新しく出發しようといふ時世なのにをかしなことぢやないか。小つびどく質問してやつた」

彼は秋子の口やかましい批評をきらつて、この頃あまり自分のしてゐることを教へたがらなくなりました。が、そんな風にちよつぱりと自分の面してゐる現實をのぞかせることもありました。

「へえー！」

秋子は一瞬呆れた顔をします。が、心はもつとひどいショックで、石につまづいたやうにぎくりとしてゐました。

正直に言つて秋子はひどく落膽しました。それは、新しい政黨がそんな政黨であることに失望してゐるだけでなく、それに反對する成一にも失望せずにはゐられない複雑な氣持でした。

もうそんな反對をはじめてゐるのか、と秋子は思ひました。それが一番痛切な失望でした。

しばらく秋子は考へてからいつもの持論にかへつてゐました。

「だから、そんなことはあの人達に任せておけばいいのよ。貴方はやつぱり組合の方に行くべきだわ。今ならできるぢやないの。何だつてできるんだわ。赤兒の手をひねるやうなものだわ」

秋子の言葉はつい罵つてゐるやうな響きになつてゐました。

以前、日本で労働組合をつくることは、コンクリートの舗道を鶴嘴でおこす重労働よりもむごい事だと秋子は思ったことがあります。その記憶と思ひくらべると、いまこのチャンスに際會しながら何かわけのわからぬことを彼がしてゐるのがもどかしくてたまらないのでした。

「組合組合といつたつて、このとしをして、まさか一人一人を組織するため工場へ入つて行くわけにも行かんぢやないか」

彼は秋子の言葉が勘所に觸れたと見えてもう聲を荒げてゐました。秋子はひやりとしました。たしかに年齢からいへば、彼はさういふ人達を指揮する地位にゐなくてはならない筈です。夫は持前の性質から虚勢をはつてゐますが、彼自身にこそきかせたい述懐であつたのかも知れませんか。秋子にはたまらなくやるせない言葉でした。

そんなことは常識として承知しながら夫を督勵してゐた筈でしたが、改めて夫にさう言はれると、年甲斐もない女學生趣味の甘さを指摘されたやうにうろたへてゐました。

さうです。もう「地の鹽」といった勝負のない世界観で、大局に影響し得ない仕事の上を這ひ歩く時代はすぎ去つてゐました。あれは思想運動の上で負け戦しか豫定できなかった暗い時代に、その枠の中であがいてゐる人間がやむを得ず體得した一種の自己満足の哲學です。

あとで考へてみると、このときの會話は、秋子を老成させたやうです。それではどんな道がのこされてゐるのだ、と秋子は改めて考へてみました。

そのずつと前の終戦直後、住宅難で秋子達が成一の先輩の家に住んでゐた頃、その先輩をたづねて、ある別派からの使ひが來ました。

その使ひの言ひ分は、近く監獄を釋放されてくるその派の首領を迎へるために、急遽黨をつくりたいから入つてくれといふことでした。その使ひに來た青年の父親とこの先輩とが昔知合ひだったので、青年は心安立てな言葉をつかつてゐました。

「この位の手みやげをもつて迎へに行かなくちや、十何年も中で苦勞した先輩に顔が合

はされませんからね。お願いしますよ」

その男は、ある外國語が専門で、戦時中は戦争關係のある所で働いてゐました。そのことがわかつてゐるので、十何年獄中にゐた先輩に顔が合はされないといふ言葉に妙な實感があつて、この先輩を苦笑させました。

「手みやげか。なる程……」

この使ひは、この先輩と一緒に成一もつかんで行くつもりで來たやうです。少しはなれた隣座敷に坐つて、話の成行を見成つてゐた秋子は、わな／＼するほど體に力が入つてゐるのを覺えました。

しかし、青年の言葉が先輩の癪にふれた瞬間成一の参加も問題にならなくなりました。話がさう割切れてからは、當の先輩以上に成一はその黨をあしざまに罵りました。ながい間この黨に含んでゐたあらゆる反吐を吐き出したやうなものです。

秋子は、成一が言つてゐることに勿論同感してゐました。政黨がそんな風に安直に再

建されることを、笑つてすまされないこととして妥協の餘地なく判斷してゐました。

しかし、また成一があとさきの考へもなく氣持よく試みてゐる論判の穂先きは、できることならはしつて行つて挫いてやりたく思ひました。彼の一言一言がみんな彼の實績としてその黨の中に積み重つて行くことを、たまらなく不安と絶望の面持できいてゐました。

理論はとも角できることなら、夫の成一をその黨の仲間に加へて貰ひたいといふ奇怪な氣持が、その申出をきいたとたん、腦の中に噴き上つてゐたのでした。そのため、先輩がきつぱりとことわつたのが殘念で、力ぬけがしてゐました。

やがて間もなくこの黨は破竹の勢で出發しました。出發點を覗いてゐるだけに、この黨が大きくなる力は火事がただ燃えひろがるやうな物理的な運動としか秋子にはうつりませんでした。

それ以來その黨の動靜はたえず新聞を賑はすやうになりました。秋子は隣室のラヂオ

の音みたいにそれを煩はしがりながらも耳を澄してゐました。

やはり夫にはいへない心のこりがありました。理論はとにかく、夫にとつて氣持よい働き場であつたのではないかと秋子はいつまでも思つてゐました。といふのは、どこか彼等の氣質と成一の氣質とに共通點があるやうに思つたからでもあります。その氣質に反撥してたかつたのが秋子の半生だつたのに、いまではその氣質のまま快く働ける場所に置いてやりたいと考へるやうになつたのであります。秋子はこれを年齢のさせる自分の墮落だと解釋しました。

かういふ心の分裂がつまりは女の中年を語るものなのでせう。この二つの折合ひがたい希ひと批判とが無理なく秋子の心の中で折合つてゐました。

こんな經驗をつみかさねてゐる秋子の悲哀には甘美なものはありませんでした。鹽だけで味つけされてゐるやうな味はひでありました。だん／＼中年の墨繪のやうな色彩のない世界に、ふかくふみ込んで行つてゐるのが事毎に感ぜられます。成一に何か仕事を

させるために世間を見わたす秋子の目ざしは、だんだん物ほしさうにさもしくなつてゐました。

それに反して成一はふしぎに年をとらない人間でした。若白髪がへつてだん／＼髪が黒くなつて行くやうにさへ秋子には見えませんでした。彼はいつも何かたのしい歌をうたつてゐました。現實に自分の企てたことが慘めでも、彼は未來の可能性を信じて、絶対に失望することなく、歌をうたつてゐました。彼はいつも非妥協的で純粹でありました。

しかし秋子は、いまでは若い時とちがつて意地悪くその歌をきいてゐました。その歌は現實にぶつかつて事實上はいくども碎けました。が、成一は別な歌をやはり同じやうに熱つぽくうたつてゐました。ある意味で彼は不死身でした。

秋子ばかりでなく、夫婦の家に出入りする人間は、ジェネラルストライキの計畫とか、日本革命の具體的なプランとか、政黨の理想的な形態、その形成されるプロセス、などなどについて、成一から日頃彼の心を占めてゐる思索の結果をさかされるのが

つねでした。若い時から勉強家であつた彼は、話題も引證も豊富で、誰でも魅せられるものをもつてゐました。

しかしそれが仇で、若い頃には、何の組織にも身を沈め得ず、何の著述も結實させ得ず、氣持よく議論で精力をまきちらしてくらしてしまひました。中年になつてからの彼はややそれに氣づいて焦つたこともありましたが、すでに手おくれでそのままの殻がすでに彼をとりまいてゐました。

秋子は、中途からさういふ彼に居たたまらなさを感じて眞剣に抗議しました。が、眞直な自分の失望の可憐さが自分の胸を詰らせたのはこの頃です。次第に離れた所からそんな彼をじろりと見るやうになつたのが、秋子の中年のはじまりだつたのでせう。

時はたつても女は意地悪く、ある事は非常によく覺えてゐるものです。たとへば若い時秋子が、夫への訪問者を煩はしがると

「われ／＼はストライキの中に坐つてゐても小説がかけるやうな習練をしなければなら

ない」

といひました。他ならぬ眞面目な思索家の成一が言ふことですから、秋子は、襟を正す心地ではるかそれに及ばない自分をかへりみました。ところが中年になると彼は

「作家は政治運動の中からぬけ出して小説を書く権利がある」

と言ひ出しました。もうこの頃にはこの二つの定義の矛盾を指摘する程、秋子は若くありませんでした。それよりも彼自身は、ストライキの中に坐つて書かなかつたやうに政治運動の中からぬけ出しても書かなかつたことが、そのときひし／＼と思はれて、皮肉になるのをどうしやうもありませんでした。

しかし、さうは言つても、やはり成一に何かして貰ひたいといふ希ひは、形が變つただけでそのまま秋子の中にありました。それは成一のためであるよりも、秋子の心のためであることが次第にはつきりして來ました。

たとへ、身分は、政黨の一支部のその一役員でもいいからとも角、その仕事をやつて

みると人もわれも許し得る一單位であつてほしいといふ、明らさまにいへば恥かしいやうな願ひが秋子にとつては切實でした。しかし、同じ支部の中でさへそれができ上るとまづ成一に對する不平がきこえました。ごく親しい少數の味方を掴むのと一緒に、大多數を敵に廻すきつかけは成一の場合ほんのちよつとした所からはじまります。

傍觀してゐる秋子の判斷では、必ずしも成一の考へがわるいわけではなく、また彼をしてゐることが必ずしもその仲間の不利益でない所に、秋子の成一に對する限りない涙と執著と悲しみとがあるのです。

たとへば、その仲間が區役所に行つて談判するやうなとき、成一はあらゆる豫期しない突發的な條件を無視して、はじめの豫定どほり押して行きます。が、他の人々は、そこに行つてみて、惡型のやうに豫想したその係員が案外小心翼々の人物だつたりした場合、十だけ豫定しておいた攻撃の行動を七位のところで切り上げようとしています。が、成一だけは豫定の十まで遂げようとしています。さうしてそのとき、皆と成一の立場はもうち